

2017年5月8日

報道関係者各位

慶應義塾大学医学部

統合失調症の治療で長期的に用いる抗精神病薬の安全性・有用性・課題点を国際的専門家パネルが検証

このたび、慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室の内田裕之専任講師は、北米、ヨーロッパ、アジアの統合失調症研究の専門家とともに、統合失調症の治療で使用される抗精神病薬の長期的な効果と安全性を検討し、その安全性・有用性・課題点を明らかにしました。

近年、抗精神病薬の使用により、長期的には統合失調症の症状が、逆に悪化するという報告が散見され、その使用の妥当性が議論的になっていました。

そこで、研究グループでは、抗精神病薬の治療効果、脳に対する影響に関する過去の報告を吟味し、その有用性と安全性を再検証しました。

その結果、抗精神病薬の使用は症状を改善し、その後の再発を防ぐのに有用であることが改めて明確に示されました。一方で、一部の患者では抗精神病薬の中止または減量が治療として適切である可能性があり、今後、各患者に合った治療法を見つける研究が必要であるとの結論を見出しました。また、抗精神病薬が脳の萎縮に与える影響は確定的な知見は得られず、今後のさらなる検討が必要であると結論付けました。

この検証結果を統合失調症の患者とその家族に周知することで、抗精神病薬の効果に対する“誤解”を解くと同時に、課題点も明らかになり、統合失調症の治療の今後の方向性を提示したと考えます。

これらの研究成果は2017年5月5日、アメリカ精神医学会が発行する「American Journal of Psychiatry」に掲載されました。

1. 研究の背景と概要

統合失調症は約100人に1人がかかる病気で、幻覚や妄想だけでなく、うつや不安になることもあり、苦痛が大きい場合も少なくありません。また、日本国内における経済損失は2兆円を超え（平成22年度厚生労働省障害者福祉総合推進事業調べ）、適切な治療が社会的・経済的にも極めて重要となっています。

統合失調症の症状は、脳の中の一部で、ドーパミンと呼ばれる神経伝達物質が増えることによって現れると考えられており、その治療にはドーパミンの機能を抑える薬（抗精神病薬）が使われています。

抗精神病薬は50年以上統合失調症の治療に使用されていますが、近年の一部の報告では、この薬を使うことによって逆に症状が悪化するため、長期的には使わないほうが良いとの主張がなされています。また、この薬が脳の萎縮を引き起こすという報告がある一方で、その逆の報告もあります。

これら抗精神病薬の効果に異議を唱えるような研究結果は、特に海外で広く報道され、患

者とその家族に動揺を与えました。

2. 研究の成果と意義・今後の展開

慶應義塾大学 内田裕之専任講師、ニューヨーク大学 ゴフ (Goff) 教授らで構成される国際的専門家パネルは、抗精神病薬の治療効果、脳に対する影響に関する、過去のメタ解析 (注 1) や体系的レビュー (注 2) といったエビデンスレベルの高い報告を中心に吟味し、その有用性と安全性を再検証しました。

その結果、抗精神病薬の使用は症状を改善し、その後の再発を防ぐのに有用であることを改めて明確にしました。

ただし、一部の患者では、抗精神病薬を中止もしくは減らすことが適切である可能性があり、今後、各患者にあった治療法 (テーラーメイド治療) を実現するための研究が必要であると考えられます。一方で、抗精神病薬の使用が脳の大きさに与える影響は、人間と動物では、必ずしも結果が一致せず、その他、薬の影響と病気の影響を区別することが困難なため、抗精神病薬が脳の萎縮に与える影響は確定的な知見は得られず、さらなる調査が必要であることも示されました。

この研究結果は、統合失調症の患者とその家族に対して、抗精神病薬の効果への“誤解”を解くと同時に、課題点も明らかになり、統合失調症の治療と研究の今後の方向性に寄与するものと考えています。

3. 論文

タイトル : The long-term effects of antipsychotic medication on clinical course in schizophrenia

(日本語訳 : 抗精神病薬の統合失調症の臨床経過に与える長期的影響)

著者 : Donald C. Goff, Peter Falkai, W. Wolfgang Fleischhacker, Ragy R. Girgis, Rene M. Kahn、内田裕之、Jingping Zhao、Jeffrey A. Lieberman

掲載誌 : American Journal of Psychiatry

【用語解説】

(注 1) メタ解析 : 独立して行われた複数の研究のデータを統合する統計解析。根拠に基づく医療において最も強い証拠とされる。

(注 2) 体系的レビュー : 特定の課題に関する研究を、恣意的ではなく、網羅的・体系的に集めて分析する手法。

※ご取材の際には、事前に下記までご一報くださいますようお願い申し上げます。

※本リリースは文部科学記者会、科学記者会、厚生労働記者会、厚生日比谷クラブ、各社科学部等に送信しております。

【本発表資料のお問い合わせ先】

慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室
専任講師 内田 裕之 (うちだ ひろゆき)
TEL : 03-5363-3829 FAX : 03-5379-0187
E-mail : hiroyuki_uchida@a3.keio.jp

【本リリースの発信元】

慶應義塾大学
信濃町キャンパス総務課：鈴木・吉岡
〒160-8582 東京都新宿区信濃町 35
TEL : 03-5363-3611 FAX : 03-5363-3612
E-mail : med-koho@adst.keio.ac.jp
<http://www.med.keio.ac.jp/>
※本リリースのカラー版をご希望の方は上記までご連絡ください。